
ジューン・ブラッド

福澤徹三



幻冬舎文庫

LINE
BLOOD

ジューン・ブラッド

蛍光灯の青白い光が地下駐車場を照らしている。

浅羽の女が住んでいるマンションだけあってあたりに停まっているのはどれも高級車だ。

浅羽のマイバッハはコンクリートの柱のむこうに黒い深海魚のような車体を覗かせている。

梶沼はクラウンの後部座席でエレベーターに眼を凝らしていた。見届け役の笹岡が運転してきたロイヤルサルーンだが恐らく盗品だ。ナンバーは千葉だし雨滴の残ったフロントガラスには車検のステッカーがない。

梶沼は左手の腕時計に眼をやった。ルミノックスの針は午前七時で蛍光している。右手はロスコ・ミリタリーのカーゴパンツに突っこんだリボルバーの銃把を握り締めている。組から支給されたチーフ・スペシャル——スミス&ウエツソンの三十八口径だ。前科のない拳銃というわりに錆が目立つ。銃身と枠に刻印はあるがファイリピン製の模造品かもしれない。

地下駐車場に車を入れてから三十分が経った。エレベーターの階数を示すランプに変化はない。梶沼の隣では仲尾がこわばった顔で貧乏揺すりをしている。助手席の奥寺もひっきり

なしに煙草を吸って落ちつきがない。四人のなかで笹岡だけが冷静だった。

歳は笹岡が四十八で仲尾が二十九、根津組から応援にきた奥寺は三十代後半に見える。

梶沼は笹岡の薄くなった後頭部に眼をやった。この仕事^{ヤマ}が首尾よくいっても最低で十五年は打たれるだろう。刑務所^なに入ったら娑婆^{しやば}へでる頃にはこの男と大差ない歳になる。

エンジン^ンを切った車内は四人の体温で蒸し暑くなってきた。

梶沼は医療用のマスクをずらして口元の汗をぬぐった。ティンバーランドのニットキャップのなかに触れると短く刈った髪はびしょびしょでアヴィレックスのリップTシャツも冷たい汗を吸って皮膚に貼りついている。

仲尾が緊張に耐えかねたように太い息を吐いて、

「きませんね。まだ寝てるんじゃないかな」

「浅羽はここに長居はしねえ。朝はいつも自宅へ帰って家族と飯を喰う」

「もう七時だ。勤めにいく連中がおりにきたら面倒だな」

奥寺がかすれた声でいった。それでもやるんだよ、と笹岡はいつて、

「このぶんじゃ浅羽がひとりで車に乗ることはねえな。じきに護衛^{クマヨウ}が迎えにくるだろう。勝

負はそれからだ」

「護衛^{クマヨウ}は何人くらいきますかね」

仲尾が訊いたが笹岡は答えなかった。

十分ほど経ってエレベーターの階数表示が動きだした。

助手席の奥寺があわてて煙草を揉み消した。梶沼は荒れた唇を舐めてチーフ・スペシャルを握りなおした。ぶるツ、と胴震いがして睾丸が下腹にめりこんでいく感触があった。こうした場面ははじめてではないが今回の仕事は相手が悪すぎる。梶沼は鼻から息を吸って口から吐くのを繰り返しかえし筋肉を弛緩して横隔膜をさげ軀の緊張をほぐした。奥寺がコルト・ガバメントの遊底をひいて薬室に弾を送りこんだ。

凝ったような視線の先でエレベーターの扉が開いた。

とたんに溜息が漏れた。おりてきたのはサラリーマンふうの中年男だった。アタツシエケースを片手に値が張りそうなスーツの肩をしきりに嗅いでいる。香水か女の体臭を気にしているようだが恐らく浅羽とおなじで愛人の部屋に泊まっていたのだろう。

クラウンを停めているのは防犯カメラの死角だが誰であれ姿を見られるのはまずい。四人は姿勢を低くして男が去るのを待った。男の乗ったアウデイが視界から消えて軀を起こしかけたとき、フルスモークのセルシオが駐車場に入ってきた。

「——きやがった」

「るせえ。頭をさげろッ」

笹岡が押し殺した声で仲尾を叱った。

セルシオはマイバックハのそばに停まって黒いスーツの男がふたりおりてきた。エンジンを切ったかどうか見えなかった。運転席にまだ誰がいるかもしれない。

黒スーツの男たちは険しい顔であったりを見まわしてからエレベーターに乗った。ひとり身長が百九十はありそうな巨漢で太鼓腹が突きでていた。もうひとり背が低い胸板は分厚く上着の肩がアメフト選手のように張っている。

階数表示のランプが上昇するのを見計らって笹岡が軀を起こすと、

「いわんでもわかるだろうが浅羽は丸腰だ。護衛を先に弾け」

「セルシオにもうひとり残ってたら、どうしますか」

奥寺が訊いた。おれが殺る、と笹岡がいった。

浅羽がエレベーターに乗ったよう階数表示のランプが下降をはじめた。

口のなかが渴ききって舌の付け根が痛い。ふうう、ふうう、と仲尾の呼吸が荒くなつた。右手に握ったブローニングが小刻みに震えている。奥寺は肩を落として身じろぎもしない。

ランプが一階で点灯してエレベーターの扉が開いた。

はじめに大男がでてきて左右に視線を走らせた。続いて浅羽が姿をあらわした。銀髪をオールバックにしてダークグレーのスーツを着ている。浅羽のあとから背の低い男がおりてき

た。梶沼はゆつくりと撃鉄ハンマーを起こした。

「いけッ」

笹岡が叫んだ。三人はドアを開けて車から飛びだした。糞がッ。仲尾が罵声をあげて先頭に立った。奥寺と梶沼があとに続いた。足が地に着いている気がしない。

大男がこちらに気づいて浅羽の前に立ちふさがると懐に右手を突っこんだ。背の低い男も浅羽をかばって前にでた。もう黒光りするものを握っている。

仲尾のブローニングが火を噴くと同時に連続して銃声が轟とどろいた。奥寺は歯を剥むきだしてコルト・ガバメントを撃っている。大男が見えないバットで殴られたようにのけぞった。ワイシャツの胸に射入口らしい黒い点がある。大男は眼を泳がせて前のめりに崩れ落ちた。右手にも着弾したようで手首が妙な方向へ曲がっている。

梶沼は両手でチーフ・スペシャルを構えて腰を落とすと背の低い男に照準をあわせた。視界の隅で仲尾が後頭部から血と骨片と肌色の脳漿のうしようをぶちまけながら倒れていった。

梶沼は撃った。手首を蹴るような反動リコイルとともに背の低い男の肩から埃ほこりがあがり拳銃が手から落ちた。男は銃を拾おうともせずにつかみかかってきた。

「どこのもんじゃ、われッ」

男は歯を剥きだして吠えた。ふたたび引き金トリガーを絞ると男は片手で胸を押さえて床に膝をつ

いた。とどめを刺そうと近づいた瞬間、男は靴下のあいだから小型のシースナイフを抜いて斬りつけてきた。すんでのところがかわしたつもりだったが左足が焼けるように熱くなつた。梶沼は男を蹴り飛ばして三発目の銃弾を腹に撃ちこんだ。

うめき声に眼をやると奥寺の脇腹に誰かがぶつかっていた。紺色の戦闘服を着た男が白靴の匕首を喰いこませて切っ先をねじりあげている。やはりセルシオには三人目が乗っていた。車をおりる前に応援を呼んでいるはずだからもう時間がない。

梶沼が背中に銃弾を撃ちこむと戦闘服の男は軀をそらして匕首を抜いた。奥寺の脇腹から鮮血がしぶいて桃色の腸が勢いよくはみだした。奥寺はたたらを踏みながらコルト・ガバメントを撃った。

戦闘服の男の唇が鼻まで裂けて白い破片が飛び散った。歯だ。射出口の耳朶から黄色いサングロのような軟骨が露出している。男と奥寺は空葉莢が散らばる床に折り重なって倒れた。火葉の匂いが鼻につく。梶沼は硝煙に噎せて咳きこんだ。

浅羽が身をひるがえしてエレベーターへむかつていく。その背をめがけて引き金に力をこめたとき、右足に痛みが走った。梶沼はよろめいたがかるうじて踏みとどまった。

大男が床に這ったまま無事な左手で足首をつかんでいた。眼の焦点は曖昧で口から血泡を垂らしているが握力はすさまじい。油圧プレスにでもはさまれたような感触でくるぶしが碎

けそうだった。銃口^{マズル}をむけると大男は顔をかばうようにひん曲がった右手をあげた。

一瞬ためらったが引き金^{トリガー}をひいた。指が何本か吹っ飛んで大男の顔は血と肉片で真つ赤になった。力が抜けた手から足首を振りほどくと浅羽の姿がなかった。

不意にタイヤの軋^きむ音がして黒いヴェルファイアが駐車場に入ってきた。入れちがいに笹岡のクラウンが急発進した。ななめに傾^かいだ車体が柱に擦^すられて火花が散った。

梶沼はクラウンを追って走りだした。

背後でスライドドアが開く音がして乱れた足音が迫ってきたがすでに弾はない。その頃になつて左足が痛みだした。カーゴパンツが黒いせいで目立たないが指で触れるとぐっしより濡れている。足をひきずりながら地上へむかつて走った。

赤坂から千代田線に乗って代々木上原で小田急線に乗りかえた。

梶沼は通勤の人波にまぎれて吊革を握っていた。

追つ手を振りきってしばらく経つがまだ呼吸が荒い。チーフ・スペシャルは指紋を拭いてからニットキャップにくるんでビルとビルとの隙間に捨てた。そのあとコンビニに入つてヘアインズの黒いTシャツとタオルを二枚買った。

「トイレを借りたいんだけど——」

防犯カメラを警戒してうつむきかげんでいった。マスクはつけたままだ。

「ありません」

レジカウントアの若い男はぶつきらぼうにいった。

Tシャツの胸元をずらして刺青を覗かせると男は顔をそむけて店の奥を指さした。

梶沼はトイレに入って便器に腰かけた。カーゴパンツを脱ぎベイツのタクティカルブーツを脱いで傷の具合を調べた。右の足首は青黒く内出血しているだけだったが左足の傷は深い。タオルを歯で引き裂いて細長い布切れを作った。布切れで太腿をきつく縛ってから硝煙が染みついたTシャツを脱いだ。洗面台で顔と手を洗い血まみれの足をもう一枚のタオルでぬぐった。洗面台の鏡に暗い眼の瘦せた男が映っている。

新しいTシャツに着替えると古いTシャツとタオルを汚物入れに捨ててコンビニをでた。左足は熱を持って疼うずいている。いまだに出血は続いているようで乗客の眼が気になる。ライニングにゴアテックスを張ったブーツのなかは乾きかけた血で粘っていて足を動かすたびにねちゃねちゃする。

笹岡はどうして逃げたのか。三人目の護衛がいたら自分が殺るといつていたのに車からでようともしなかった。敵の応援が想定外だったとしてもおれを乗せる余裕はあったはずだ。梶沼はささくれた唇の皮を噛みながら窓の外を見つめた。

朝の街並は鉛色なまりいろに煙けいっている。浅羽のマンションをでたときは小降りだったが急に雨脚が烈はげしくなった。けさのニュースでは今週から梅雨入りしたといっていた。

もう警察が動いているはずだから六本木の事務所には近づけない。アパートのある新宿で電車をおりるとホームのゴミ箱にマスクを捨てて公衆電話を探した。携帯はいざというとき身元が割れないよう前もって笹岡に預けてある。

公衆電話を見つけて一ノ瀬いちのせに電話すると笹岡から連絡はないという。

「しょうがねえ奴だな。浅羽組の連中に生け捕られてなきやいいが」

「おれより先に逃げたんだから、それはないでしょう」

「事情がわかりしだい、はじめはつけさせる」

「そんなことはいいです。ただ仲尾と奥寺さんが——」

一ノ瀬は溜息をついて、

「高くついたな」

「ええ」

「とにかくご苦労だった。浅羽を殺とれなかったのは残念だが、敵の軀こに弾は入れたんだ。これで組長おやじも恰好がつくだろう」

いまだここにいるかと訊かれて新宿だと答えると大久保のスナックで三十分後に落ちあおう

といった。一ノ瀬が守りもをしている店らしい。ルミノックスを見たら八時半だった。

新宿駅をでてタクシーに乗った。雨脚はいつこうに衰えない。フロントガラスを往復するワイパーのむこうを職場へむかう傘の群れがよぎる。カーラジオのニュースでは事件の報道はなかったものの緊急配備が敷かれていても不思議はない。

一ノ瀬が指定した店はすぐに見つかった。古ぼけたテナントビルの二階にアガシと看板がでている。梶沼は足を忍ばせて階段をあがった。

営業はしていないようだがシャッターは半分ほど開いている。シャッターをくぐるようにしてドアを開けると頬骨の尖とがった三十くらいの男がカウンターのなかで会釈した。ときどき事務所で顔をあわせる一ノ瀬の舎弟だ。

梶沼は店に入ってカウンターの椅子に腰をおろした。店名からしてコリアンスナックのようで薄暗い店内にはキムチの匂いが漂っている。眞露ジロのボトルがならんだ棚に高麗人参やんにくを漬けこんだ薬酒の瓶がある。

セブンスターをくわえると男はすかさずカルティエのライターを差しだして、

「お疲れさんでした」

懇いんげんに頭をさげた。梶沼はうなずいて煙を吐きだした。

男は灰皿をカウンターに置いて、

「道具はどうされました」

「赤坂で捨てた。兄貴は？」

「もうじきこられます。なにか飲んでてください」

「水をくれ」

「水ですか。ジュースやビールもありますし、なんならウイスキーでも——」

「とりあえず水でいい」

男はアイスピックで割った氷をグラスに入れて瓶入りのミネラルウォーターを注いだ。

梶沼は男が差し出したグラスを手にとった。喉は渴のどいていたがどことなく違和感がある。グラスをカウンターに置いて灰皿で煙草を揉み消した。

椅子から腰を浮かすと男はカウンターから身を乗りだして、

「どうされました」

「すぐもどる」

「どこへいかれるんですか」

「煙草を買ってくる」

「セッターなら店のがありますよ。吸ってください」

「ちがう銘柄がいいんだ」

「なにがいいか教えてください。おれが買ってきます」

「いいから、じっとしてろ」

「でも、もう一ノ瀬の兄貴がきますから、ここにいてもらわないと——」

男を無視して立ちあがったとき、カウンターの奥でごとりと音がした。奥にはキッチンがあるように赤と青の派手な暖簾のれんがさがっている。

梶沼は男の眼を見つめた。心なしか瞳孔が縮んでいた。

「誰かいるのか」

「——誰もいません。製氷機でしょう」

梶沼はグラスの氷を一瞥いちべつしてから踵かかとをかえした。

店をでるとすばやくシャッターをおろして階段を駆けおりた。

梶沼は雨のなかを走った。追っ手の気配はなかったが早く大久保を離れたい。出血と疲労のせいでしだいに息があがつてくる。ふたたびタクシーに乗って恵比寿えびすへむかった。梶沼はシートに身を沈めて大きく息を吐いた。

あのままアガシにいたら恐らく無事ではすまなかった。浅羽を殺やれなかったのがまずかったのかそれともほかの事情なのか。いずれにせよ好ましくない事態が起きているのはたしか

だった。笹岡がずらかったのがそもそも不自然だ。杞憂きゆうだという可能性もわずかに残っている。しかし状況がはつきりするまで一ノ瀬に連絡する気はしない。むろん新宿のアパートにもどるのは危険だった。

紗希さきのマンションに着いてインターホンを鳴らすと眠そうな声がかえってきた。

「まだ九時すぎよ。どうしたのいったい」

「どうかしたからきたんだ」

オートロックを開けさせて七階にあがった。部屋に入るとドアの鍵とドアチェーンをかけた。下着の上にシャツを羽織った紗希が怪訝げんげんな顔でさつきとおなじ質問を繰り返した。

梶沼は黙ってブーツを脱ぎキッチンで水を飲んでからリビングにいった。フロアリングの床に古新聞を敷いて腰をおろす。カーゴパンツを脱ぐと左足の傷に紗希が眼を見張ったが理由はわなかった。

「早く病院へいかなきゃ」

「いいから救急箱を持ってきてくれ」

置き薬の救急箱にはスプレー式の外傷液と包帯とガーゼが入っていた。外傷液で傷口を消毒してからガーゼで血を拭いた。脛すねからふくらはぎにかけて斜めに走った傷は魚の切り身みたいにはっきり口を開けている。

紗希に頼んで裁縫道具とラジオペンチを用意させた。女の部屋にラジオペンチはありそうになかったがアクセサリーの修理に使ったとかでちっぽけなやつがあった。

縫い針をラジオペンチでつまんで百円ライターの炎で炙^{あぶ}った。縫い針が赤くなるまで炙つてからすこし熱が冷めた頃を見計らって尖端を釣針状に曲げた。針穴に糸を通して傷口を縫おうとしたら紗希が悲鳴をあげて両手で顔を覆った。

紗希を寢室へ追いやってあらためて縫いはじめた。自分で傷口を縫うのは二年前に六本木のバーで白人どうしの喧嘩を仲裁にいつてナイフで腕を斬られたとき以来だ。傷口に針を刺すのも苦痛だがそれ以上に糸が肉を通り抜ける感触が不快だった。十三針で縫い終えて余分な糸を鋏^{はさみ}で切ったときには全身が汗にまみれていた。

傷口にガーゼを貼り絆創膏^{ばんそうこう}でとめると玄関にいつてブーツをとってきた。底に溜まった血をティッシュペーパーでぬぐつてからブーツをキッチンの開きに隠した。カーゴパンツはタオルで血を拭いてから大ざっぱに裂け目を縫った。

紗希を呼んで抗生剤がないか訊くと歯科医院の薬袋を持ってきた。何年か前に歯茎が化膿したときにもらったという薬袋のなかには抗生剤と消炎剤があった。どちらも使用期限をすぎているのだがなにもしないよりはましだ。

薬を呑んだあと寢室のベッドで横になると紗希が軀を寄せてきて、

「ねえ、なにがあったのか教えてよ」

「おまえは知らなくていい。そんなことより、きょうは店を休め」
あのさ、と紗希はいった。

「このあいだ逢ってから、どれだけ経つと思う？」

「さあ、ひと月くらいか」

「もう二か月よ。電話はめったにつながらないし、メールしたって返事もくれない」

梶沼は黙って天井を見つめた。

紗希とは半年ほど前に行きつけのバーで知りあってその日のうちに深くなった。歳は二十五で銀座のスナックに勤めているというのがそれ以上のことは知らない。梶沼も自分の職業については話さなかった。もつとも背中と胸に刺青があるのに堅気だといっても通用しない。

「ずっとほったらかしといて、なによ。連絡もなしに朝早くから血だらけでやってきて理由はいわない。それできょうは店を休めて、どういうこと？ あたしはいつたいなんなの」

「とにかく休め。それから、おれがいいというまで外へでるな」

「勝手なこといわないで」

「じゃあ好きにしろ。もうすこし経ったら、ここをでていく」

「でてくつていえば、いうことを聞くと思ってるの」

紗希の愚痴を聞いているうちに目蓋まぶたが重くなつた。

ゆうべから緊張のしどおしで一睡もしていない。だが眠つてはいけな
い。頭のなかでそう繰り返えしつつ意識が遠くなつた。

眼を覚ますと隣に紗希がいなかった。

腕にはめたままのルミノックスは二時五十五分をさしている。

そつとベッドを抜けだしてリビングを覗いた。紗希は膝を抱えてテレビを覗いていた。画面
ではバラエティ番組が流れている。

「なにかニュースはあつたか」

背後から声をかけると紗希はおびえた顔で振りかえつた。

「なにも、つていうかニュース観てないし」

梶沼はうなずいてトイレにいった。なにげなく玄関に眼をやるとドアチェーンがはずれて
いた。用を足してからリビングにもどつて紗希の隣に腰をおろした。

「いびきがすごかつたよ。よつほど疲れてたみたいね」

「コーヒーをいれてくれないか」

紗希はうなずいてキッチンに立った。チャンネルを変えると三時のニュースがはじまつた。